

面接で社長と人生談

日本と海外を繋ぐ商社マンに



日本で働く
留学生OBたち
フジモリ産業株式会社
王 翔渤さん
(中国出身)

中国・青島
ビールで世界に知られる中国山東省・青島。19世紀末、ドイツの租借地となつた青島には今なお洋風の建築物が多く残っている。青島出身の王さんは2010年4月、「日本人は物事を長期的な視点で判断することに長けている。中国人が苦手な部分を学びたい」と日本に留学した。5年間の留学生活を経て、現在は商社とメーカーの機能をあわせ持つフジモリ産業で機能性フィルムを中心とする海外営業に関わっている。

父親は歯科医
父親は歯科医で、「息子である自分の就職先を準備するため歯科クリニックを開業してくれた」といふ。小中高、歯科専門学校と親が準備してくれた道を懸命に歩んで来たが、徐々に「自分の人生」を考え始めるようになった。

和歌山で就職活動
日本語学校を経て、和歌山大学大学院経済学研究科に進学。1年間の研究生活の後、修士課程に正式入学した。修士1年の4月から就職活動の下調べに取掛かった。企業説明会は都市部で開かれることが多く、和歌山を拠点に就職活動を行うことは厳しい環境だった。そのため、「和歌山で出来ることは全部やる」とを心掛け、インターネットなどを駆使して日本の就職活動の分析、業界研究を徹底して行った。商社・化学に希望業界を絞った。夏休みには医療器具の専門商社で1ヶ月間のインターンシップに取り組んだ。志望業界を生で体験し、「モノを右から左に流すだけではこれからの商社は生き残れない。まだ見えぬ顧客の課題を掘り出し解決策を提示できる商社マンになりたい」と強く思った。

社長の人柄
フジモリ産業と出会ったのは偶然だった。ある志望企業の説明会に参加するため大阪まで出かけたが、せっかくなので空き時間に参加できる企業説明会を調べたことがきっかけとなった。入社を決めたのは社長の人柄だ。社長と総務部長を相手にした最終面接。普通の質問から面接が始まったが、「やがて力が入りこれからの人生を熱く語りはじめてしまつた」。すると社長がその話に共感。「結局1時間近く社長と人生談に花を咲かせた」結果、採用の方向で話が進んだ。しかし、その場で総務部長が採用に反対し、社長が例外的にその場で握手をして「社長が例外的に採用を決めてくれた。社長の心意気に入社の意思を固めた」。

人材育成にかける費用と考え方
実際に入社して驚いたことは、人材育成にかける費用と考え方だ。国際課に配属され、現在化成品の転売等に携わっているが、新人でも申請すれば海外出張でき、昨年は新規取引先企業開拓のため2回台湾を訪問した。「挑戦したうえで失敗はよしとしてくれる」社風だ。さらに、「適性・適応」を考慮してポジションを与えてくれる。成功見込みのある計画を立てれば、自分のやりたいことをさせてくれる。器の大きさが一番の魅力と評する。入社1年目の下積みは今年度で終わると熱く語る。

「自分と向き合う時間」
生き方を徹底的に考える
4月からは戦力の一員として奮闘することになる。「日本と海外を繋ぐために、両国の文化・認識を理解し必要な情報を仲介して伝えることが重要。最初には利益の少ないビジネスモデルでも、取引先企業を育てて良い仕事ができる関係を築きたい」と熱く語る。

インターンシップをはじめた。ビジネスの知識・実力不足を痛感し、「専門的な知識を身に付けなければ競争に勝てない」とすぐさま日本留学を思い立った。青島は日本との経済交流が盛んで、日本人の仕事ぶりを身近で見て尊敬していたから、既に日本留学を考えている友人達に相談しながら日本語学校を探し、ビザの申請も済ませ、後は学費を納めるだけ。しかし「学費納金の前日まで両親に日本留学を打ち明けてはいなかった。いよいよ期日が迫り、意を決して両親に日本留学への熱い思いをぶつけた。もし資金援助が得られなければ借金をしてまで留学するつもりだ」と打ち明けた。社長は「これまでに私には夢がないのだからか」と父親は心配していたようで、喜んでくれた。

就職活動 2017
第2回
自己分析
国際基督教大学(ICU)
学生サービス部長 岸本 誠氏
就職相談グループ長 稲田 聡氏

3月から就職活動がいよいよ開始される。就職活動の軸となるのが「自己分析」だ。なぜ自己分析が重要なのか。ICUの岸本氏と稲田氏にお話を伺った。

<ポイント>

- ①「なぜ今の大学を選んだのか」、「学生時代に最も頑張ったことは何なのか」、留学生であれば「なぜ日本に留学したのか」といったことを自分に問いかけて振り返ってみる。
- ②何がしたいのか明確ではなく、軸がぶれている人と企業と一緒に働きたいと思わない。
- ③内定を勝ち取ってきた学生を見ると、自己分析やエントリーシート(E.S)・面接対策などに多くの努力を重ねてきた。
- ④日々の学生生活のなかで考えて、行動することが重要。日々考え、自己分析ができていく学生はE.Sや面接がどんどんと上達していく。
- ⑤学生を就職活動前と後で比べてみても、自分と向き合うプロセスを経ることで成長がはっきりと見て取れる。就職活動において、簡単なことや近道はない。

「自己分析」とは何なのか、軸を確立することです。稲田「自己分析と大学を向き合う時間」のことで、岸本「なぜ今の大学を選んだのか」といふ問いかけは、自分自身のことから振り返ることに繋がります。稲田「自己分析は、自分自身のことから振り返ることに繋がります。稲田「自己分析は、自分自身のことから振り返ることに繋がります。」

<ICUの充実した就職支援>

- ・多彩な就職活動支援行事
毎週火曜日の午後、コンボケーションアワーと呼ばれる学内行事のための時間が設けられている。この時間を利用して、定期的に就職活動支援行事を開催。春休みには「ICU PLACEMENT WEEK 学内合同説明会」を1週間開催。
- ・進路決定者による進路相談会
毎年、「学生キャリア・アドバイザー」とよばれる進路が決定した在学生たちが、これから就職/進学活動を迎える後輩学生の相談や疑問に答える「進路決定者100人による進路相談会」を開催。
- ・同窓生からの手厚い就職活動支援
「キャリア・サポーターズ」と呼ばれる学生の就職活動を支援する同窓生が、学生のOB・OG訪問に協力。同窓会が主催する就職活動支援イベントも年複数回行われ、同窓生が業界・企業の特徴、普段の仕事内容の説明、模擬面接などが行う。
- ・グローバルな就職活動支援
アメリカニューヨークに本部のある、日本国際基督教大学財団(JICUF)が、ニューヨークでのインターンシップ「Global Link」を斡旋。海外に18支部ある同窓会が、様々な機会に学生の活動を支援。